



「第二次日本経穴委員会」便り

～第38回 経穴の順序～

第二次日本経穴委員会・作業部会委員 うらやまひさつぐ 浦山久嗣

経過報告

本誌が読者諸氏のお手元に届くころには、WHOつくば会議の決議内容と、それに付随する図譜がすべて完成する予定である。去る世界鍼灸学会連合会(WFAS)北京大会でWHO/WPROの崔昇勳伝統医学諮問官が明言されたように、WHO版「標準経穴」は、翌2008年の3月の刊行に向けて、一連の作業が行われることとなろう。

限られた条件の下で各担当委員の不眠不休の努力の成果が、間もなく、一般公開できることを何より嬉しく思っているのは、筆者ばかりではあるまい。なにしろ、WHO側から全面的な公表についてストップを掛けられている状態なので、言いたくても言えないもどかしさに、プレッシャーを感じてきたのである。

最終段階での苦労話は次回の便りに委ねるとして、今回は「閑話休題」として、誰も感じているであろう「経絡の順序」に対する疑問についていくつかの仮説をご紹介します、読者のご意見を伺いたいと考えている。

肺・大・胃・脾…

鍼灸の入門時に、「経絡経穴概論」で必ず行われるのが、あの「はい・だい・いー・ひ…」という経絡の順番を覚えることであろう。しか

し、この順番がどのようにできてきたのか、なぜこの順番なのかを理論的に答えることができるだろうか。少なくとも経絡を記述した主な文献にはその明確な答えは見付からないようである。したがって、経絡の順番を説明しようとするれば、何らかの仮説を導入する必要がある。

なぜ中焦から始まるのか？

『靈枢』経脉篇は肺経から始まり、「中焦に起り、下りて大腸を絡い、還りて胃口を循り、膈を上りて肺に属し、肺系より横に腋下に出で…」という。同じく営気篇には「営気の道、穀を内るを宝と為す。穀胃に入り、乃ち之を肺に伝え、…故に気は太陰より出でて手陽明に注ぎ、上行して足陽明に注ぎ、下行して附上に至り、大指の間に注ぎて太陰と合す」とあり、胃に入った穀から営気が生まれ、肺から経絡を介して全身に巡るといふ。このような記述は『靈枢』では営衛生会篇・五味篇・玉版篇・五味論篇などにも見られ、『補註銅人腧穴鍼灸図経』にも、「中焦なる者は、胃の中脘に在りて、水穀を腐熟するを主る。水穀の精微、上りて肺に注ぎ、肺榮衛を行らす。故に十二経脉、此れ自り始と為す」とある。

この理論を踏まえ、胃の食物から生命エネルギーが得られ、それが肺から全身に行き渡ると

認識されていたことから、経脈は肺経から始まる理由が理解されよう。

『易経』の八卦との関係

八卦とは、易占に使用される、陽爻(一)と陰爻(--)を3本重ねてできる8種類のパターンであるが、純陽の乾(☰)と純陰の坤(☷)を除く六卦を五行説によって経脈と結びつけてみると、陰卦(☱ ☲ ☳)は手に、陽卦(☴ ☵ ☶)は足に配当され、陰卦は臓に、陽卦は腑に配当されていることが解る。

八卦	☰	☱	☲	☳	☴	☵	☶	☷
卦名	乾	兌	離	震	巽	坎	艮	坤
卦象	天	沢	火	雷	風	水	山	地
五行	金	金	火	木	木	水	土	土

しかも、陰卦の陰爻も、陽卦の陽爻も経脈の走行順序に合わせて、上段・中段・下段と移行する形となり、人迎寸口診も上段は三倍、中段は再倍、下段は一倍となっている。そしてもちろん、肺と脾、大腸と胃、心と腎、小腸と膀胱、心包と肝、三焦と胆は同名経の関係にある。

五行	八卦	経脈	五行	八卦	経脈
金	☰	肺・大腸	土	☷	胃・脾
火	☲	心・小腸	水	☵	膀胱・腎
木	☴	心包・三焦	木	☴	胆・肝

このように見比べてみると、八卦と経脈の順番とは明らかに関連性がありそうである。しかし、『靈枢』五乱篇の「気 心に在る者は、之を手少陰心主の輪に取る」や『難経』十八難の「手の心主・少陽の火は、足の太陰・陽明の土を生ず」とあるように、従来、心包・三焦は火に属すると考えられており、木とは考えられてはいなかった。したがって、この仮説を導入するにあたっては、『靈枢』における心包・三焦

の五行観を見直す必要があるだろう。

衛気と営気は逆に流れる

『靈枢』中にある経絡連環の思想は、実は経脈篇・営気篇・五十営篇・脉度篇のみにしか見られず、経絡の走行経路のバリエーションとしても最も後発のものであったと考えられる。

経脈篇や営気篇に見られる「肺・大・胃・脾…」の循行経路を成立させるには、その前提として、営衛生会篇にいう「衛気は陰を行ること二十五度、陽を行ること二十五度、分ちて昼夜と為す」の部分で「衛気は、営気の循行方式を基準として、夜間は剽悍さが低下して営気に従って二十五周循行し(陰行)、昼間は剽悍さが増して営気と逆行して二十五周する(陽行)」とする解釈(「衛気昼間逆行仮説」と仮称)が存在したのと考えざるを得ない。

営衛の大会する時間を、営衛生会篇の「夜半」から「平旦」に変えて「朝に肺から衛気が廻り出す」と解釈し、また、衛気昼間逆行仮説の導入によって、衛気が活発な昼間は相生の順序を逆転させて「肺→脾→心」に、衛気が沈静化(相対的に営気が活発化)する夜間は相生の順序のままで「腎→肝」としたのと考えられる。その後、夜間に配当される臓の数を対応させるために心包を加えて「腎→心包→肝」とし、さらに、表裏関係の腑を対に配することで「肺→大腸→胃→脾→心→小腸→膀胱→腎→心包→三焦→胆→肝→肺」という、よく知られた経脈篇や営気篇の連環経路ができ上がっていったものとも考えることができる。

ほかにも、仮説を設定することは可能であろう。読者諸氏はどのようにお考えであろうか。